〈研究ノート〉

コミュニティとユートピア共和国

―― スコットランド研究の視点を求めて ――

Communities and Utopian Republic

―― For a new point of view on Studies of Scotland ――

久保田　義　弘

要旨：

本稿では，トマス・モアの『ユートピア』を取りあげて，コミュニティにおいて人と人の連帯を構築し，社会と地域社会再生のための方法を考察する。54 都市からなる連邦国家において，都市市民の相互の連帯ならびにその支配と被支配の関係を考察する。その領土は都会と農村から構成され，その人民は殆ど市民であり，各市民は 2 年間農村で働き，生活物資の生産に従事する。都会では，市民は，毛織物業，亜麻織物業，石工職，鍛冶職，大工職などのいずれかの職業に就くことが義務付けられ，その職業は基本的には世襲される。市民には職業選択の自由は保障されているが，しかし，実際には大半の市民は親の職業を継ぐ。市民は自由民ではあるが，他の都市に旅行するには，市長（都市統領）の許可を得る必要がある。市民間の連帯性を保つために，第 1 に，法律による支配ではなく，市民から選ばれる司祭による教化による連帯（公正と正義）を示し，第 2 に，私有財産制を否定し，市民間にもつ者と持たざる者から生じる不平等を避け，第 3 に，分配の公正を達成するために，貨幣の保有と使用を認めていない。しかし，そのユートピア共和国では，第 1 に，奴隷刑と死刑が認められ，第 2 に，財貨は共同生活する市民に必要なだけ配分され，かつ，その家族長および部族長によってその公正な分配が制御され，第 3 に，君主による支配ではなく，選挙で選任され，終身職の都市統領や家族長や部族長などの役人の知性・理性による支配が理想とされている。本稿の第 1 節では，『ユートピア』の第 1 章で取りあげて議論している当時のイングランドの犯罪と法律あるいは刑罰について，第 2 節では，ユートピア共和国の地勢・地形，都市と農村について，第 3 節において，ユートピア共和国の社会階層，第 4 節において，ユートピアの生活様式：大家族による共同生活と資源配分を概観し，私有財産制を廃止し，家族長および部族長による市民間の連帯性について説明する。第 5 節では，ユートピア共和国は平和を求め自衛戦争の正当化する平和と戦争の問題と取りあげる。第 6 節では，ユートピア共和国の宗教と司祭による国民教化の方法を概観する。

ユートピア共和国は，財貨が豊富にあり，富み栄える社会として想定されている。雇用問題のない社会として描かれている。スコットランド地域のコミュニティー・カンパニー論や社会的企業論はモアの失業のない社会を実現させる企業論なのであろうか。未知数である。
（キーワード：連邦国家，公正と正義，私有財産制，分配の公正さ，コミュニティ，貨幣と市場）

はじめに

現代のスコットランド地域における地域再生戦略の研究を進めるに当たって，スコットランドは一方ではイングランドとスコットランドおよび北アイルランドから構成される連合王国の一地域であり，他方ではヨーロッパ連合の周辺地域でもあることを念頭に置き，さらに後者の視点で現在のスコットランドを捉えるならば，スコットランドは主権を持つ国(State)と見なされる。国であるならば，領土と国民（人民）そして主権が存在しなければならない。その領土は，すでにスコットランド地域として存在している。現在のスコットランド地域は，次のように形成されてきた。そのはじめに，ダル・リアダ王国あるいはオールバ王国（9世紀中から11世紀中ごろまで)の下では，スコットランド地域の中央部がその領土であったが，スコウシア王国ではロージアンが加えられ，マルコム3世(在位1058年－1093年)，デイヴィッド1世（在位1124年－1153年）あるいはアレグザンダー2世（在位1214年－1249年）の治世下に置いて，ロス，ケイスネス，サザーランド，ストラスクライド，ギャラウェイが領土に加えられ，さらにアレクザンダー3世(在位1249年－1286年)の治世下でヘブリディーズ諸島，そしてジェイムズ3世(在位1460年－1488年)の治世下でシェトランド諸島とオークニ諸島が領土に加えられた。スコットランド人の領土は，13世紀初めにイングランドとの国境線，13世紀後半にはヘブリディーズ諸島，15世紀には，オークニ諸島やシェトランド諸島をスコットランド領にして，今日のスコットランドと同じ広さの領土に達している。17世紀からの「同君連合」においても，スコットランドの領土意識は，ジェイムズ6世の治世下の領土意識と遜色はないと理解される。1707年の「連合法」（あるいは「合同法」）によって，イングランド議会とスコットランド議会が統合され，「グレートブリテン」が成立した。それ以降，スコットランド人とイングランド人はイギリス人と呼ばれる。連合法の下ではスコットランド人の主権はどこにあり，何をアイデンティティとしてスコットランド人は活動したのであろうか。

スコットランド地域には，520万人（2009年）の人口がある。スコットランド地域には主権があるのであろうか。この国民主権が本稿の課題になる。大英帝国および北アイルランド連合王国の一地域であるスコットランド地域には大英帝国の憲法下で行動することを求めら

れる。その意味でスコットランドには主権はないとも考えられうる。大英帝国がコモンウエルス（Common wealth）であるならば，スコットランドはコミュニティとして存在し，スコットランドにも主権を付与することが出来る，と考えられる。

コミュニティは，近隣社会，小規模社会，あるいは空間的に拘束された地域社会など，小規模集団を基礎にする特定の社会組織であると規定する社会学的コミュニティ論がある。地域社会の再興をコミュニティの再生に求める議論はこの流れに入れられる。テンニエスの『ゲマンインシャフトとゲゼルシャフト』（『コミュニティと社会』とも訳される）等によって練り上げられた古典的なコミュニティ概念もこの流れにある。われわれのスコットランド研究において，スコットランド地域のアイデンティティ（スコットランド地域の主権）をこの視点におくこともできる。その視点を求める第２の流れには，文化的に規定された集団に焦点をあてる文化人類学的コミュニティ論である。個人の帰属の探求をするアイデンティティ論がこの流れにはいる。スコットランド人の国民性あるいはスコットランド人とは何かを求めるアイデンティティ論はこの流れに繋がる[1]。その第３の流れは，市民社会，自治などの集合的アイデンティティに力点を置く政治的コミュニティ論であるが，これは，政治意識と集合的行為の観点からコミュニティを捉えている。ジャン・ジャック・ルソーの『社会契約論』やジョン・ロックの『市民政府論』はこの流れに入る，と考えられる。最後は，哲学や歴史学の分野にはイデオロギーあるいはユートピアとしてのコミュニティ論がある。本稿で詳細に検討するトマス・モアの『ユートピア』はこの流れにある。

上述の４つの古典的あるいは伝統的なコミュニティ論の流れに対し，今日ではグローバル化の視点を加えてコミュニティ論を煮詰める必要がある，と感じている。インターネットの普及などによる社会のグローバル化ならびにトランスナショナルな動きを組み込む新しいコスモポリタンのためのコミュニティ論が必要である。今日のグローバルリズムの下でのコミュニティ論と，伝統的なコミュニティ論とそのコミュニティ論の類似性あるいは異質性を探ることがグローバル化した社会の動きを探るためには必要である。

現代のスコットランドが，大英帝国および北アイルランド王国の連合国あるいは英国連邦から独立し，主権を行使する独立国としてヨーロッパの中で自立できるかどうかを検証し，グローバル化した世界でスコットランド地域の人々の行動やその政策を見極め分析する必要がある。グローバル化した現代社会において，古典的あるいは伝統的なコミュニティ論を脱し，コミュニティ論を再考し，コミュニティ（コモンウエルス）と社会の対立として捉える

[1] この流れに沿って執筆した「スコットランド研究(1)―― スコットランドの歴史と文化と政治敵視点から，地域再生戦略，その国民性ならびに分離・独立運動の考察 ――」の第１章〝スコットランド人の国民性とアイデンティティ ―― スコットランド中世の窓から ――〟はこの視点での接近である。

のではなく，異なったコミュニティが同時に構築されうるという視点をもって，グローバル化した社会におけるコミュニティを見ることにする。

現代のスコットランドで展開されている〝コミュニティ・カンパニー〞あるいは〝社会的企業論〞などの新しい企業論とその概念の歴史的・思想的・理論的背景を探り，スコットランドで展開されつつある社会改革（分離・独立運動の動き）を評価し，今日のスコットランドの地域再生政策あるいは地域経済再興政策を展望することがこの研究の大きな目的である。

スコットランドの地域再生に関する研究の一つの思想的手掛かり，あるいは，コミュニティ（Common Wealth）として，その主権を確立する可能性を『ユートピア』から得ることを期待している。

第 1 節　現実社会と『ユートピア』の狭間

1.1　トマス・モアの生涯と『ユートピア』

トマス・モア（Thomas More）（1478 年生－1535 年没）は，法律家であり，学者であり，政治家であり，かつ著作家であった。モアは，1529 年の 10 月に大法官になり，1532 年 5 月にそれを辞している。1533 年にヘンリー 8 世（在位 1509 年－1547 年）はアン・ブーリンと再婚するが，モアはウエストミンスターで挙行されたアン・ブーリンの戴冠式への出席を拒否した。1534 年にヘンリー 8 世が王位継承法を議会通過させたが，モアはその法に対する宣誓を拒否した[2]。モアは査問委員会に呼び出されるが，王位継承法を拒否し続けた。彼は，ロンドン塔に幽閉され，1535 年 7 月ロンドン塔タワー・ヒルで処刑された。このときモアは，詩編第 51 編を誦した，と伝えられている。モアが，彼の時代批評『ユートピア』を書き下ろしたのは 1515 年から 16 年に架けてである。それはモアが外交使節[3] としてブルージュに滞在している時に得た着想をまとめたものである，と思われる。その時，アントワープに滞在している時にエラスムスの弟子であったピーター・ジャイルという人物と親しく交わり，そこで『ユートピア』の第 2 巻を書き上げ，翌年，ロンドンでその第 1 巻を書き上げた。

モアは，彼の時代批評を『ユートピア』（ユートピア共和国）の語り手であるラファエル・ヒスロデイの言葉に込めて語っている，と思われる。彼は，『ユートピア』の第 1 章でイングランド（イギリス）の現実を書き綴り，その第 2 章ではユートピア共和国での法令や生活習慣や宗教や職階や戦争などについて描いている。実際に，モアは，当時のイングランドにお

[2] モアは，アン・ブーリンの子が王位を継承することを拒まなかったが，その法令がキャサリンとの離婚を承認し，さらにローマ教皇の権威を否定する文言が含まれていたので，モアは宣誓しなかった。

[3] ヘンリー 8 世の妹とスペイン王フィリップ 1 世の王子カルロスとの間の結婚問題に端を発し，イングランドとスペインとネーデルランドとの間に緊迫した外交問題が発生し，その打開のためにロンドン市民の代表としてモアが参加した。交渉は難航したため，モアはアントワープに足を伸ばした。

いて，どのような社会の実現を期待（理想）していたのであろうか。その思想を『ユートピア』の窓から覗いてみることにしよう。

トマス・モアの『ユートピア』では，一種の国家論としてユートピア共和国が説かれている。彼のユートピアを見る第１の観点は，公正と正義の観点である。この観点に関するモア自身の見解は，次の通りである。すなわち，国家の繁栄あるいは凋落は，支配者と役人の態度に依存し，彼らが賄賂等によって正道を踏み外す時，あるいは，依怙贔屓や貪欲な悪徳によって彼らの判断が歪められる時，国家存立のために最も欠くことのできない絆としての公正が破壊され，社会の秩序が乱れ，泥棒や強盗などが現れ，紳士連中，金属商，怠けること，あるいは，お世辞を言うことしか知らない奴ら，および賭博などのつまらない娯楽の創始者などに多額の報酬が払われ，その一方で，国家の繁栄に欠くことのできない貧しい農民や抗夫や人夫や鉄工や大工などを厚遇することを怠る国家は，不正な非人情な国家である，とモアはラファエル・ヒスロデイに語らしめている。

モアは，特権階級が社会の繁栄をもたらすのではなく，貧しい労働者，馬車引き，鉄工，大工および農民が繁栄の源泉であるとういう価値観をもっている。モアは，国家の繁栄に欠かすことのできないこの人々に惨憺たる生活を強いる国家に正義はなく，国家の繁栄を労働者，鉄工，大工，農民などの職人に託している。モアは，決して貴族や金属商などの金持ちが国家の繁栄をもたらす者ではない，と説いている。汗水を流し働く労働者，鉄工，大工，ならびに農民への分配分が著しく少ないことを嘆き，それに引き替え，国家の繁栄に貢献しているとは思えない階層に分配分が多く配分されることに憤慨し，分配の公正さが(社会的)正義である，と説いている，と理解される。

モアの社会を見る第２の観点は，貨幣の使用を禁止し，私有財産を否定し，共同生活による公平な分配・配分の観点（平等な分配・配分）である。分配の公正さは，モアの国家を大家族として規定することによって可能になる，と思われる。彼のユートピア共和国の繁栄は，すべての個人（裕福な人も貧しい人も）の利益を尊重する心，あるいは，モアの思想に立脚すると，キリストの権威を恐れる心を法律に反映させる点にある。しかし，現実のイングランド社会では，金持ち階層（とくに貴族とその係累）の傲慢さがそれを妨げていると，モアは見ている。この点にモアの風刺と批判の矛先が向けられている，と考えられる。

一般に，国家は，領土（国土），国民および主権の観点から説明される。『**ユートピア**』において，国民とはユートピア市民，国土とはユートピア島，主権者はその市民である。以下，第１節では，イングランドの現状，第２節では，ユートピア国について，国土，国民，その生活様式：大家族生活と共同生活，戦争，宗教の観点から取りあげる。コミュニティ論とユートピア共和国の関連性を解き明かすことが，本稿の目標である。

1.2　盗人・窃盗者を絞首刑にする法社会の現状

ラファエル・ヒロスデイ[4]が取り上げたイングランドの現実とそれに対する対策を巡る対話から『ユートピア』の第１章を覗いてみよう。その対話は，ラファエル・ヒロスデイが，カンタベリーの大司教であり，枢密卿であり，かつ大法官でもあったジョン・モートン[5]師に招かれて，師の家の食卓で何人かの客との間で進められている。その対話の中で，ユートピア人の風俗，慣習，法律，規則などを話すきっかけが与えられている。ラファエル・ヒロスデイは，イギリスに４，５ヵ月ほど滞在し，その滞在中にカンタベリーの大司教で枢密卿かつ大法官のジョン・モートン師の世話になった。その対話の法律に詳しい平信徒[6]は，盗人に苛酷で峻厳な処罰を加えられているのに，殆ど盗人が減っていないのはどうしてであろうかと嘆いた。これに対し，ヒロスデイは，窃盗罪が死刑をもって臨む刑ではないと反論し，彼は，盗人や窃盗者には他の対策を講じるべきであることを提案した。

15 世紀から 16 世紀前半のイングランドにおいて，社会秩序の維持のために多くの法律を作り，１台の絞首刑台で 20 人の窃盗者を絞首刑としたが，盗人は一向に減少していなかった。盗人に対して死刑で臨むのは，盗人に対する刑としては正義の限界を超えていると，たかが窃盗に対して絞首刑で臨むことが残酷無情であるだけはなく，国家にとっても有害であるとラファエル・ヒロスデイに反論させている。そのような社会がいくら繁栄しようとも，ラファエル・ヒロスデイ（モア自身も）は，その社会を受け入れるべきではないとを確信していた，と推察される。

---

[4] 彼については，次のように紹介されている。彼は，ポルトガル生まれで，若くして彼の先祖からの財産の全てを親類縁者に分けて，放浪の旅に出て船乗りになった。彼は，アメリゴ・ヴェスプッチに伴って新大陸への航海に３回参加し，顔はそのために赤く日に焼けていた。モアは，ヒスロデイを彼の航海での経験から前人未踏の国々や住民の話を知っている人物として登場させている。ヒスロデイは，ラテン語も話すが，ギリシャ語のほうが堪能であった。また哲学者プラトンの様な人物であると紹介されている。
ヒスロデイは，３回目の航海中にヴェスプッチの許可を得て，グーリケの国に留まった。そこから，赤道直下の砂漠と猛獣や蛇や野蛮人の国を横切り，砂漠を出ると今度は緑に覆われた野性の少ない大地を抜けると，再び都市に出た。そこから方々の国を周り，この時，立ち寄った方々の国の中から，善政の行われていた国を（「ユートピア」国）発見した。そして全くの偶然から，タブリベイン（セイロン島）に出て，そこからインドのカリカットに出て，そこから自国の船に便乗し，帰国した。この時，立ち寄った方々の国の中から，善政の行われていた国を「ユートピア」国としてモアやピータ・ジャイルに紹介した。

[5] ジョン・モートン（1420 年生？－1500 年没）は実在した人物で，トマス・モアがモートン家で幼少の頃一時期過ごした。『ユートピア』では彼は，権威，学識，人格において尊敬に値する人物として紹介されている。また背丈は中肉中背，姿勢はしゃきっとしていて背筋が伸びていた人物として紹介され，顔は，親しみ深い威厳があり，その話しは，穏やかで真摯でありかつ聡明であったとされている。言葉は精錬されており，雄弁であり，簡潔であった。法律の知識は深く，才気の鋭さは比類なく，驚くべき記憶の良さであった。国王は彼の助言に信頼をかけていた。

[6] 彼は，毎日，１絞首台で 20 名が絞首刑されているのに，盗人の数は減らないことを嘆いた。

1.3　盗人が増える第一の原因：落ちぶれ貴族の従僕

ラファエル・ヒロスデイ（モア自身）は，イングランドで盗人や窃盗の多い理由として，第１に，多数の従僕がいるからであると説いた。主人である貴族が死ぬと，その従僕[7]が，路頭に迷い，乞食あるいは窃盗あるいは強盗に変身するので，窃盗者が社会に増加した。また貴族階層が廃れる場合にも，その従僕が社会に溢れ出し，彼らは盗人になった。これが，窃盗犯の源泉であった。貴族の後ろ楯を失った従僕は，餓え死にするか，あるいは，泥棒になるかのいずれかであった。暖衣飽食の好き勝手な生活をし，腰に剣と盾を伊達にさし，横柄な面構えで街を航行闊歩していたその連中が郎党に迷ったとしても，彼らを雇う貴族も農民もいないのも事実であった。ゆえに，貴族層の従僕があふれた社会では，窃盗犯が増えると，ラファエル・ヒロスデイ（モア自身）は結論づける。

この郎党に迷う連中を戦争に駆り出すという考えが法律に詳しい平信徒から提案されるが，その無為徒食の従僕を養うことは無駄である，とラファエル・ヒロスデイは反論する。そすると戦争の経験のない兵隊など全く信用にならないので，怠惰や訓練不足で兵隊の心身がだらけるのを恐れて，次々に戦争をおい求めて行くことになる。それによって，下手をすると，自らの常備軍によって国家自体が蹂躙され，破壊される。この事態に至れば，兵隊を常備することはかえって国家にとって害悪になる。

1.4　盗人・窃盗者を生み出す第２の源泉：羊が人を喰う囲い込み

ラファエル・ヒロスデイ（モア自身）は，イングランドで盗人や窃盗の多い理由の第２として，イギリスの羊を取りあげた。貴族や紳士や修道院長などが農民を土地から追い出し，それを囲い込み，牧場にしているため，土地を追われた農民が浮浪者になり，泥棒・窃盗者になり，社会に盗人や窃盗が増加し，そのために，彼らは法の裁きを受けることになると，ラファエル・ヒロスデイは力説する。少数の人の貪欲が農民を法の裁きに掛けることになるとヒロスデイは述べ，悠々と安逸な生活を送ることに満足しないで，貴族や紳士や聖職者である修道院長までが国家に害悪を及ぼすのを返り見ず，農民たちの耕作地を取りあげ，牧場として囲い込んでいると，批判する。広大な土地を柵や垣で一ヵ所に羊の群れを囲み，多くの農民が土地から追い出され，その結果，その農民は放浪者になり，持ち金を使い尽くし，泥棒を働き，不合理であるが，正しい法の裁きを受けて絞首刑台の露と消えていくと，説いている。この光景にヒロスデイ（モア自身）は憤りを禁じ得なかった，と思われる。

[7] 主人が死に，職を失って盗人などを軍人として雇用することも考えられるが，ヒスロデイは，盗人を常備軍に抱え，戦争に出向かわせる考えには反対した。それは，この常備軍制度は国家が蹂躙される可能性があるからであった。

羊の数の増加によって農民達が生産現場から追い出され，彼らが浮浪者や盗人になることによって，食料品生産が減少し，その価格が上昇した。この価格の上昇が，次には，召使いを追い出し，その数を減らした。追い出された召使い達は，乞食あるいは泥棒･窃盗者になった[8]。また羊毛の価格も上昇した。それは，羊が少数者に独占されているからであった。囲い込みによって羊の数は増加したが，しかし，羊を売る人が少なくなったために，かえってその価格は上昇した。

以上の盗人や窃盗者の増加についての理解は，ラファエル・ヒロスデイを通して語られたトマス・モア自身の社会認識であったと思われる。モアの社会認識は，道徳的であり倫理的である。彼は，この囲い込みがこの独占者の貪欲から生じている，と確信している。それによって締め出された農民が盗人あるいは窃盗者になった。そうであるのに，その盗人や窃盗犯を殺人罪と同一視[9]し，法の裁きによって，極刑あるいは死刑に処するのは道理にかなっていないと，ラファエル・ヒロスデイは述べている。極端で残酷な政治，峻厳な国法は許せないと，ラファエル・ヒロスデイの口を借りて，モアは彼の見解をのべている，と思われる。

1.5　盗人・窃盗者に対する対策・政策：ポリレロス人の方法

ラファエル・ヒロスデイは，厳格で極端な政治や国法に替わる対策を 2 つ提示している。第 1 に，泥棒や窃盗に走る人を抑えるためには，彼らを正業に就けることを提案している。第 2 に，神の誡めにならうことを提案している。神は，汝殺すなかれ，と誡めている。ラファエル・ヒロスデイ（すなわちトマス・モア）は，神の誡めを人間の制定する法律に先行するとしている。神が許さない限り，人間には自殺する力も他人を殺す力もないと想定（確信）し，神の誡めに背いて，人を殺してもかまわない（神の誡めから完全に解放される自由がある）と人間が制定した法律によって規定するならば，あらゆる問題において神の誡めを守る範囲を決めるのは人間の法律になり，人間が神を超えることに疑問を懐いている。厳格で峻厳なモーゼの律法においてさえ，窃盗罪を罰するのに罰金刑で臨んでおり，死刑ではなかった。神の愛と恩寵によってわれわれを愛し子として慈父の愛で愛しみ給うのであるから，われわれは相互に殺し合うことはあってはならないと，ラファエル・ヒロスデイ（すなわちトマス・モア）は，神の誡めを人間の法律に勝るとしている。

[8] その一方で，貴族の従僕，職人あるいは農民までもが贅沢な生活をし，さらに，社会には女衒，あばずれ，売女，街娼，娼婦，淫売屋，女郎屋，酒場，居酒屋，銘酒屋，その上，賽子ころがし，トランプ，双六，テニス，球ころがし，鉄輪投げなどのいかがわしい賭博の類が横行する。これに溺れた連中がカネに窮したとき，泥棒にたどり着く。トマス・モアは，ラファエル・ヒロスデイの口を借りて，贅沢やふしだらな生活やいかがわし賭博を戒めているのであろうか。

[9] あらゆる罪を同一視し，凶悪の烙印を押す法律をストア風と呼んでいる。

この第１の代替案に沿う法律の事例としてとして，ポリレロス人[10]の法律が適切であるとラファエル・ヒロスデイ（すなわちトマス・モア）は，紹介している。はじめに，窃盗犯はその盗んだものをその持ち主に返し，もしそれを紛失していた場合には，犯人の財産から相当額を弁済する。次に，窃盗犯は，国家の共通の召使いとして公共の労役に服する。公共の負担[11]で食事や生活費は出され，このようして公共の労役を課すことによって囚人[12]は，確実に，仕事に就く[13]ことが出来ると，紹介し提案している。仕事に精を出す囚人（奴僕）は，束縛や屈辱などは一切受けることなく，労役の他には苦痛や不快は少しもないが，そこの囚人（奴僕）には，幾つかの服従すべき規定が課されていた：

⑴　奴僕は，皆同じ色合いの服装[14]を身につける。

⑵　奴僕が貨幣を貰うことは，死刑である，また奴僕にそれを与える奴僕も死刑である。また奴僕から貨幣を貰う自由人も死刑である。しかし，奴僕が，他人からご馳走になったり，衣服を貰ったりすることは禁止されていない。

⑶　奴僕にはいかなる武器も与えられなく，武器を手にする奴僕は死刑である。

⑷　各州の奴僕を区別するために，州別に奴僕は標章を付ける。この標章を破棄した場合にも死刑である。また他の州の奴僕と話し合っても死刑である。

⑸　自身の州をでる逃亡奴僕あるいは逃亡を企てる奴僕も死刑であり，逃亡を隠蔽した自由人は奴隷刑にされる。もしこのような隠謀を摘発・密告すれば，膨大な褒賞が規定によって与えられ，奴僕であれば自由が与えられる。

ポリレロス人の法律をイギリスに取り入れるかどうか。同席していた法律に詳しい平信徒は，ポリレロス人のような法律が施行されたら，イギリスは未曾有の危殆に直面するであろうと口をひんまげて述べたが，枢密卿ジョン・モートンは，一度，この法律を実際に実験することを請け合い，さらに，付け加えて，イギリスの浮浪者にその法律の適用を促している。

[10] この人は，トマス・モアの造語であり，多くの愚かさを意味する。ポリレロス人は，人の機微を掴んだ善政を行っていた。彼らは，ペルシャに年貢を納めていることを除けば，完全に自治を享受していた。彼らは，領土拡張の意志もなく，他の国から侵入される心配がなかった。領土は高い山に囲まれていたので，他国からの侵入の心配はなかった。

[11] この負担は州によって異なっていた。囚人（奴僕）に給与が寄付金から賄う州もあり，一定の土地から得られる収益が彼らの給与に充てる州もある。また奴僕の食費は全て公共の負担であった。その負担方法は，寄付，土地からの収入など州ごとに異なっていた。州によっては，奴僕が市場で売買され，自由人に雇用された。奴僕は日給で雇用された。

[12] ポリレロス人は，囚人のことを奴僕と呼んでいる。

[13] 仕事に就くことを拒む囚人は，鞭で打たれた。

[14] 一目見ただけで自由人と囚人（奴僕）の区別が出来るようにした。

1.6　国家安寧と哲人王の思想：ラファエル・ヒロスデイに宮廷使いの勧め

『ユートピア』にモア自身を登場させ，モアは，ラファエル･ヒロスデイが宮廷に士官すること勧めている。モアは，ラファエル・ヒロスデイの考えが国家の安寧福祉を増進させることを確信していた。彼は，プラトンの見解を持ち出した。すなわち，モアは，王者自身が哲学の研究に精進するかあるいは哲学者が王になること[15]によって,国家究極の幸福が達成させる理想を描いていた。

この哲人王[16]の見解をラファエル･ヒロスデイの述べたことから説明しよう。はじめに，侵略戦争についての哲人王の見解を説明する。いまイタリアのミラノ，ナポリおよびベネティアなどを配下に入れようとしているフランス王に哲学者が仕えるとしよう。彼は，侵略戦争ではなく，フランス王はフランス一国の統治に専念すべきであり，領土拡大は止めるべきである，と諌める。ラファエル･ヒロスデイは，ユートピア国南東のアコーラ人[17]の法令によって，侵略を止めることを提案している。また国の資産は蕩尽し，国民は破滅に瀕しているので，侵略戦争の準備をすることは王の欲望のために多数の人民を塗炭の苦しみに陥れるのが関の山であると述べ，フランス一国のみの統治が望ましいことを提案している。すなわち，フランス王国に全力を尽くし，その国を富裕に繁栄させ，その臣民を愛し，かつ臣民にも愛されるようにし，平和に臣民を統治し，すでに領有する国土だけで満足し，他国への侵略を控えるべきであると，その見解を述べている。

次に，国王の懐をいかに豊かにするかの顧問達の意見は，全て，人民の生活を貶めるものであり，ラファエル・ヒロスデイもモア自身も彼らの意見には賛成してはいない。

(1)　正貨価値を支払の時は引き上げ，その受取の時は引き下げれば，国王の財政は潤う。

(2)　戦争を口実に無辜な民から金を集め，途中で戦争中止を訴え，国王の財政を膨らませる。

(3)　古色蒼然とした法律を持ち出し，法律違反の科料を徴収する。

(4)　一般市民に有害なものを法律で禁止し，違反者から罰金科料を徴収し，その法令で損害を被る人から特別措置として示談金を受け取ることによって，国王の財政を豊かに出

[15] プラトン自身はこの見解が国王に受け入れられないことを予言していた。すなわち，すでに国王自身が邪な議論に惑わされて，哲学者の助言を誠意を持って受け入れない，と予言されていた。

[16] 哲人王の統治方法の１つは，全ての人々の富と便益の平等な分配を保つことを規定することであった。またそれが一般市民の幸福への道であると見ていた。そのためには私有財産権が放擲される必要があった。

[17] アコーラ人は，ユートピア国にある無可有郷を意味する国民であった。彼らの国は，侵略して，２国を治めた経験をもっていた。新付の民は，法律を軽蔑し，謀反を企て，日々暴動を起こし，国王は心労に両国を統治する負担に耐えかねた。このとき，アコーラ人は，２国を治める力が国王にはないこと，および，片手間の統治を止めるように懇願した。

来る。

⑸　裁判官を国王の絶対的大権の支配下に置き，国王の戦争の折，軍隊を維持し，多額の金を融通出来るようにする。

この顧問官達の見解に対し，ラファエル・ヒロスデイは，国王の名誉と安泰を維持するものは，人民の富であり，決して国王自身の財産ではないと述べ，国王はすべからく自身の富ではなく人民の富を増やすように心がけるべきであり，人民の生活をよくするのにその富と幸福を奪うことしかしない国王は，自由人を統治するすべを知らないと白状すべきであり，放蕩を止め，傲慢を去り，人民の軽侮や憎悪などの不徳を抑えるべきであると応酬している。人民を貧窮に陥れる国王は，国王という名称があるばかりで，その王威は失われていると結論づけている。この見解がプラトンの哲人王の思想に支えられている，と理解される。

ラファエル･ヒロスデイは，マカリア人[18]の法律を例に取り挙げ，宝庫の中には１千ポンド以上の金または銀を所蔵[19]しないと述べ，そこでは，王自身の富よりも人民の富や繁栄を国王は願っている，と紹介し説いている。

以上のラファエル・ヒロスデイの提案を顧問会議が聞き入れるかどうかについて，ラファエル・ヒロスデイとモアは議論している。ラファエル・ヒロスデイは，その提案が無視されるであろうと述べ，プラトンも賢者は国家に関わるべきではないと述べていることを引き合いに出している。それに対し，モアは，完全に無視されるとしても，国家そのものを捨てるわけには行かないから，誤った考えや邪悪な考えを改めるためには，善い方に導くことが出来なくとも，せめて最悪の事態に陥らないように知恵を絞り，工夫を凝らし，処置することである，と返答している。これに対し，ラファエル・ヒロスデイは，キリストの教えが今日の世情に合わないから，キリストの教義に従わなくともよく，世情に当て嵌まるようにキリスト教徒にその教義を勝手に歪めるような意見には賛成できない，と返答している。

1.7　新しい社会の描写：私有財産制の否定

財産の私有が認められ，金銭が絶対的な権力を振る所では，国家の正しい政治と繁栄を期待できないと，ラファエル・ヒロスデイは述べている。また彼は，ユートピア国のように少ない法律で万事を巧く円滑に運ばせ，徳を重んじる国で，全てが共有され，全ての人があらゆるものを豊富にもっている国と今日の国（沢山の法律を次々と制定するが殆ど効果の上がらない国であり，私有財産を享有し，他の人の財産と区別するために夥しい法律を制定して

[18] これは，幸福な人々を意味するギリシャ語である。

[19] この１千ポンドの財貨は，国内に謀反が起こっても国王が一戦を交えることが出来る額であり，また外国からの侵入に対しても迎え撃つことが出来る額であった。また国王自身が他人や他国に侵入することを抑制する額であった。

いる国）を比較し，プラトンの考え[20]に賛意を表したい，と述べている。ラファエル・ヒロスデイの見解をまとめよう。それは，哲人王の政治の１つの説明でもある。それは，

(1) 私有財産の取りやめと，平等かつ公平な分配の実施

(2) 私有財産[21]が続く限り，大多数の人民の背には貧困と苦難の重荷が残される

である。ラファエル・ヒロスデイは，プラトンの『国家論』から着想を得て，哲人王（正義の実行者）の支配を理想とし，貧富の差のない理想郷をユートピア共和国で描き，私有財産制が貧富の差の源泉であり，金持ちが貧困層を支配する社会を生み出していると判断し，この私有財産制の否定が可能になる社会を描くことに気を配っている。モアの私有財産の否定は，キリスト教に基礎を置く中世共産主義である，と理解してよいのであろうか。

しかし，『ユートピア』ではモア自身がラファエル・ヒロスデイの哲人王の思想に異を唱えている。私有財産制を廃止すると，人間はかえって幸福な生活を営めないのではないか，と反論している。というのは，そうなれば人々があまり労働に精を出さなくなるからである，と説いている。そうなれば，社会的に物資が不足し，人々は少ない産物で生活することになり，物質的には恵まれない生活になる。社会には暴動や流血が起こり，社会の秩序維持が不可能になる。また上下の差のない社会では，役人の権力や権威はどのように保持されるのかはなはだ疑問である，とモアは反論している。このモアの疑問を解消させるために，ラファエル・ヒロスデイが第２章でユートピア共和国の生活様式や法律について語る展開になっている。

第２節　ユートピア共和国の地勢・地形，都市と農村

2.1　領土としてのユートピア島とその地勢・地形

ユートピア[22]国の領土はユートピア島である。この地勢・地形を概観しよう。ユートピア島は，全体として新月（三日月）の形をしていて，その地形から外敵の侵入を困難にし，国防の観点から利便性が高い地勢である。この島の幅は 200 マイル（ローマの１マイル＝約 1.5 km で計算すると，300 km）ほど，その両端は 500 マイル（およそ 7,500 km）におよぶ環状線である。またその幅は両端に向かうに連れて細くなっている。両岸は 11 マイルほどの海峡で隔てられ，そこから外海につながっている。その２つの岬の磯部には，浅瀬，砂州，あるいは

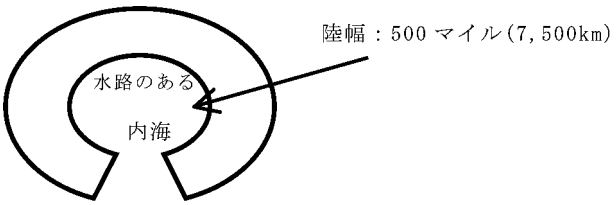
[20] 全ての人民に権利の平等を与えない国の立法者にはならないと言う意見。アルカディア人とテバイ人がプラトンに立法者になることを願ったが，彼らは権利の平等を拒否したので，プラトンは彼らの所には行かなかった。

[21] 私有財産制の廃止が平等な社会構成のための必要条件になっている。

[22] ユートピアは Utopia（英語）と綴られるが，ギリシア語の $o\nu\tau\acute{o}\pi o\varsigma$ と書かれている。どこにもない国を意味している。

岩礁がある。岬と岬の間にも大きな岩があり，その岩の上には塔が建てられ，そこに守備兵が常駐している。その島の内陸部の殆どが湾のようになった内海を持ち，その周囲がすべて陸に囲まれて，風から守られていて，荒れもせず静かに海の流れは大きな淀んだ湖のようである。その腹部は湾のようになっていて，よって船舶は陸地のあらゆる所に投錨できる地形をしている。その内海に巡らされる水路は他国人には近づきがたいほどに複雑にされているために，ユートピア人でさえその内海を航行するのに航路標識に導かれることを必要としている。またこの島では，その標識をずらし，移動させることで敵の大海軍でさえも容易に壊滅させることが出来る仕掛けを備えている。この内海が異邦人の進入を著しく困難にしている。

（図－１）　ユートピア島の地形：環状線状の円形



両端は 11 マイルの隔たり

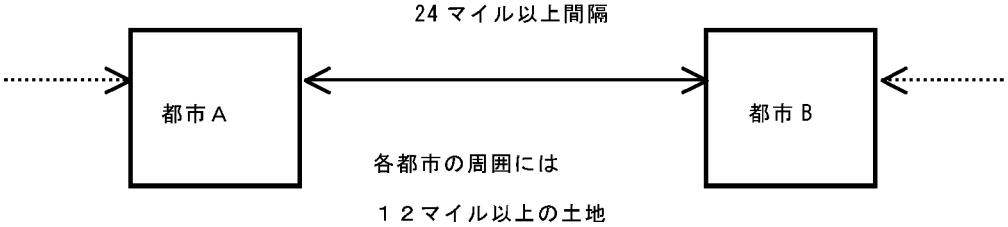
2.2　ユートピア市民と都市

その国民（ユートピア市民）が居住する都市に目を向けてみよう。ユートピア市民は，その島にある 54 都市(都会あるいは州都)[23] に居住し，同じ国語を用い，また同じ生活様式と同じ制度や法律を持っている。それぞれはよく似た構造をしているので，任意の都市を知ることはすべての都市を知ることになる。アモーロート市(ἀμαυρός 暗い都市の意でロンドンを示していると思われる）がユートピア国の首都である。他の都市から毎年 3 人の学識経験も優れた長老が集まってくる。市民（州民）は，40 人以上の市民と 2 人の奴隷からなる家族の集まりである一つの大家族(30 家族あるいは世帯からなる大家族)を形成している。市民(州民)の居住する都市と都市の間の距離は 24 マイル以上あり，歩いて一日以内に日帰りできる距離を保って適当に配置され，その周囲に 12 マイルにおよぶ土地（農地）をもち，都市（州内）の至る所の農村（田舎）に農場住宅[24] が建てられる。都市と農地で 1 つの都市（州）をな

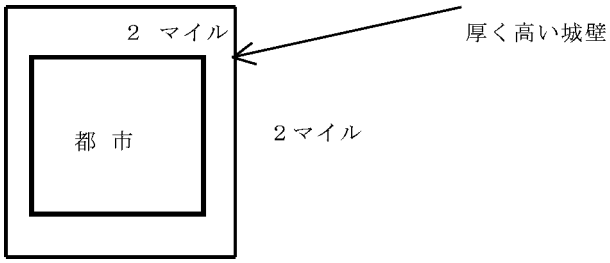
[23] モアは都市の集合体として国家を想定した。ギリシアの都市国家を念頭にしたのであろうか。それともブリタニア島をユートピアに見立てたのであろうか。モアのころイングランド・ウエールズには併せて 54 の州があった。

[24] これには農耕に必要なあらゆる器具や道具が十分に備え付けて入れられている。

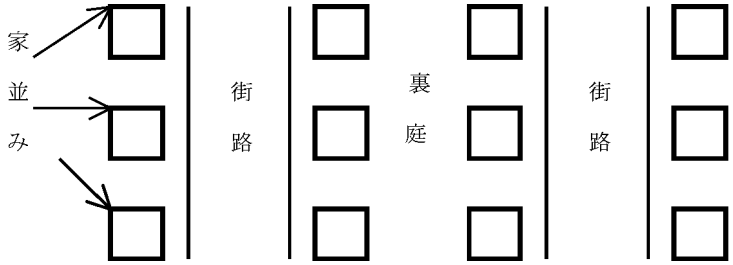
（図－２） 任意の２都市間の距離と周囲の土地



（図－３） 都市は城壁に囲まれた正方形



（図－４） 都市の構造：２マイルの街路と整然とした家並み



し，都市は都会（州都）でもある。

以下では，議事堂が所在し，この国の首都であるアモーロート市（ロンドン市）を取りあげ，都市の地形を説明する。他の都市もアモーロート市に同じ形をしている，と説明されている。城壁で囲まれた都市であり，環濠都市であり，防衛が優先の都市計画になっている，と理解される。その構造的特長には，

⑴ この都市は，低い丘の中腹にあり，その形は四角形をしている。

⑵ その横幅と縦幅ともに２マイルで，市の四方には，幅の厚くて高く，しかも櫓や堡塁のならんだ城壁を回らせている。

⑶ 市の三方面は，深く広く藪や茨や棘のいっぱい生えている濠で取り囲まれている。も

う一方は，アダナイダ河[25]（テムズ河のこと）が濠の役割をしている。

(4)　街路はよく整備され，その道幅は 20 フィート（１フィート＝約 30 cm）である。

(5)　家屋[26] は大廈高楼，３階建て，壁の外側は，堅い燧石，漆喰あるいは煉瓦が用いられ，その内側は木材で頑丈に補強されて，屋根は平らで漆喰で覆われた。窓にはガラスが入れられた壮麗な建築である。家屋は，街路の端から端まで櫛の歯のように整然と並んでいる。家には，裏庭があり，街路に取り囲まれている。各家屋には二つの入り口があり，それは表通りと裏庭につながる。いずれの入口も両開きになっているが，錠が掛かっていなく，閂がおろされていない。家の中に入ろうと思えば誰でも自由に出入りすることができる。個人の私有物はなく，家そのものは 10 年ごとに抽選で取り替えられるので，家の中には，私有物はおかない。

がある。

ユートピアでは，住宅は共同利用され，固定資産の私的所有を排除している。住宅には誰も施錠をすることはなく，誰もが自由に出入りできる環境が保たれている。住宅には裏庭がつき，入り口が表と裏にある。

2.3　生産拠点としての農村（田舎）

農村（田舎）は都市周囲にあり，そこには生産の拠点としての農家がある。この農家では農耕をし，家畜・家禽を飼育し，燃料としての薪を切り出し，これは水路あるいは陸路で都市に運搬される。麦がパンのためのみに栽培され，飲料としては清浄な水か果実酒（葡萄，林檎，梨の果実酒）が用いられる。都市全体で消費される量は，正確に把握され，毎年その必要以上の生産が行われ，各農家の余剰生産物は隣人に配分される。農村（田舎）での生産に必要とされるすべてのものは，都市から無償で持ち込まれる。

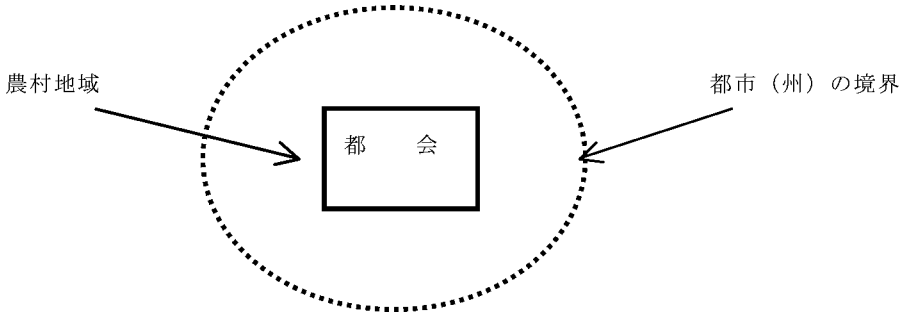
その都市の農村（田舎）の社会構造であるが，そこには 30 戸の農家ごとに一人の統率者，すなわち家族長（部族長）がいる。その家族長（部族長）は代官の役割を果たす。各農家には生産に従事する 40 人の市民と２人の奴隷が配置され，そこに２年間滞在した 20 人は都会（州都）に戻され，それに代えて 20 人が都会から農村（田舎）に廻される。新たに農村（田舎）に配置される市民を指導する人は，そこに１年以上の滞在経験のある市民である。翌年には，訓練を受けた人が指導にあたる。このように毎年農耕に従事する人を交替さる方式を

[25] アモーロート市の上手 24 マイルの所にある泉から始まり，多くの小川が集まり，大きな川幅になっている。そして大洋に注いでいる。

[26] ユートピア島の年代記によると，初期の頃の家屋は低く，羊小屋のようであり，その作りも荒削りであった。壁は泥壁，屋根は藁葺きであった。

採るのは，特定の人に困難で苦労の多い農耕を強制しないためである。食料品の生産・供給のために農村（田舎）に農場住宅が建てられ，ここに農耕に必要なすべての機具や道具が備え付けられ，都市から順番にやってくる市民が住み，農業生産に従事している。市民は，都市に住み，一定期間，生産のために農村（田舎）で農耕に従事し，農業生産に携わる。収穫時には，家族長（部族長）は，都市の役人に刈り入れをする人を頼むことができる。

（図－５） 都会と農村



ユートピア共和国では，富の源泉を農業に置き，都市市民の全てが農業生産に関わるように，農村における２年間の農業生産活動に派遣される。農村社会での生産に富の源泉は都市から生産手段の無償調達に支えられる。これは，修道院における修道士や修道女の営みをユートピア共和国の市民の農業生産活動に重ね合わせている，と推測できる。ユートピア共和国では，十分な自然の恵みが与えられ，必要な生活物資は必要以上に生産され，市民が食生活に不自由することはない。この点において，ユートピア共和国は，食料品などの生活物資の不足などの生産問題から解き放されている社会である。ユートピア共和国は，生産物の配分・分配問題を社会的に解決する必要のある社会であり，生産された物資の分配が社会問題になる社会である。

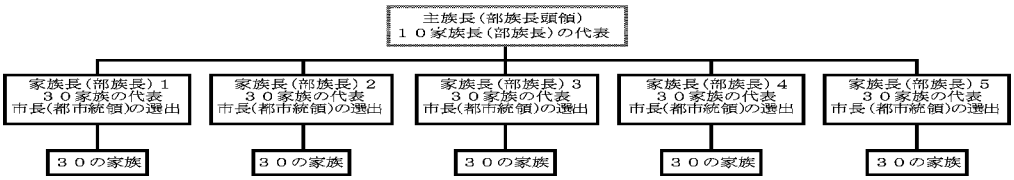
第３節　ユートピア共和国の社会階層

前節第２項で，ユートピア市民が同じ国語を用い，また同じ生活様式，同じ制度さらに同じ法律をもち，一つの大家族あるいは世帯を形成すると説明し，生産問題から解放された，必要な生活物資が不足なく調達できる社会である，と説明した。さらに，この市民社会では，社会統治の観点から役割分担に応じた社会階層が形成されている。役人あるいは職人からなる社会階層がこの社会には存在する。以下では，ユートピア島におけるその階層構成を見てみよう。

3.1　社会と階層

ユートピア共和国には,40 人以上の男女と 2 人の奴隷[27] から構成される家族が 6,000 家族[28] ある。ユートピア共和国の市民は,家族単位[29] で生活している。各家族は家父長とその主婦(家母長）のもとで統率される。その市民は，役人（家族長（部族長），主族長（部族長頭領），市長（都市統領））あるいは農業者などの職人からなる。役人は，肉体労働が免除される階層であり，職人は，生産・供給に従事する階層である。ユートピア共和国には，古代の都市国家と同様に，奴隷が存在するが，その奴隷は，ユートピア共和国の市民ではない。これは社会階層外の人であった。この国では，役人が，ユートピア市民の支配層を形成する。役人は，家族長（部族長），主族長（部族長頭領），ならびに市長（都市統領）からなる。30 家族ごとに 1 人の役人が選出され，この役人は家族長（部族長）と呼ばれ，家族長（部族長）は全部でおよそ 200 人いる。その家族長（部族長）の任務は，怠けてぶらぶらするユートピア共和国の市民が出現しないように監督することであり，またその市民が牛馬のように重労働しないように注意し監督することである。各役人の任期であるが，市長（都市統領）の任期は，専制の嫌疑が懸けられない限り，終身であるが，他の役人の任期は 1 年である。

（図－６）　主族長（部族長頭領），家族長（部族長）および家族の関係：例示[30]



上の図は，主族長（部族長頭領）と家族長と家族との間の関係を例示した図である。一人の主族長（部族長頭領）のもとに，10 人の家族長（部族長）と 300 の家族がおかれる。各都市には 20 人の主族長（部族長頭領）がいることになる。主族長（部族長頭領）の任務は，３日ごとに市長（都市統領）とともに市会（長老会議）に出席し，市政に関する事項を審議す

[27] 都会の家族（世帯）に 2 人の奴隷が居たかどうかは明確に記述されていない。農村世帯には 2 人の奴隷が居ると記述されている。『ユートピア』では都会でも農村でも 1 家族の構成人数を 40 人と想定しているが，農村世帯と都会世帯ではその構成が異なっている。

[28] ユートピア共和国の都市には，都会の 6,000 世帯と農村世帯から構成される。都会には 24 万人以上の市民が住んでいる計算になる。農村には何人住んでいるのかは明確には把握できない。

[29] 一家族の人数は，農村世帯と同様に 40 人であるとする。家族構成は明確に記述されていないが，14 歳前後の子供（成人）を 10 人以上 16 人以下持つことを規定している。未成年の数についての規定はない。

[30] 実際には，主族長（部族長頭領）の下には 10 人の家族長（部族長）がぶら下がるが，ここでは 5 人しか書いていない。

ることである。主族長（部族長頭領）の選挙は毎年行われるが，滅多に更迭されることはない。総勢 200 人の家族長（部族長）は，市長（都市統領）として有能な人を選出することを宣誓し，次に一般市民によって指名されている 4 人の候補者の中から市長（都市統領）を 1 名秘密選挙によって指名する。4 人とは，市の 4 地区からそれぞれ 1 名を市長（都市統領）選挙の候補者として市会（長老会議）に推薦された者である。

（表－1） 役人の選出とその任務

都市の役人	選　　出	任　　務
市　　長(都市統領)	(1)市の 4 地区からそれぞれ 1 名が市長（都市統領）選挙の候補者として市議会(長老会議）に推薦される。 (2)200人の家族長(部族長)は，市長(都市統領）として有能な人を選出することを宣誓し，一般市民によって指名されている 4 人の候補者の中から市長（都市統領）を 1 名秘密選挙によって指名する。	市会（長老会議）を執り行う。市政に関することを審議・協議する。
主族長(部族長頭領)	主族長（部族長頭領）の選挙は毎年行われる。20人の主族長（部族長頭領)。	3 日ごとに市長（都市統領）とともに市会（長老会議）に出席し，市政に関する事項を審議することである。
家　族　長(部族長)	30家族ごとに 1 人の役人が選出される。200人の家族長（部族長)。	(1)怠けてぶらぶらするユートピア共和国の市民が出現しないように監督することであり，またその市民が牛馬のように重労働しないように注意し監督することである。 (2)いつも 2 人の家族長（部族長）が交互に出席し，市政に関する事項を審議することである。

市政は，市長（都市統領)，主族長（部族長頭領）ならびに家族長（部族長）によって行われる。すでに説明したように主族長（部族長頭領）は，3 日ごとに，市長（都市統領）と共に市会（長老会議）に出席するが，またこの会議には，毎日，新しい顔ぶれの 2 人の家族長（部族長）も交互に出席する。市政に関することは，大小に関係なく，その法制化前の 3 日間，市会（長老会議）で議題に供せられなければならない[31]。市議会（長老会議）あるいは一般選挙場(民会)[32] 以外のところで一般の政治について多少でも協議することは死刑をもって禁じている。

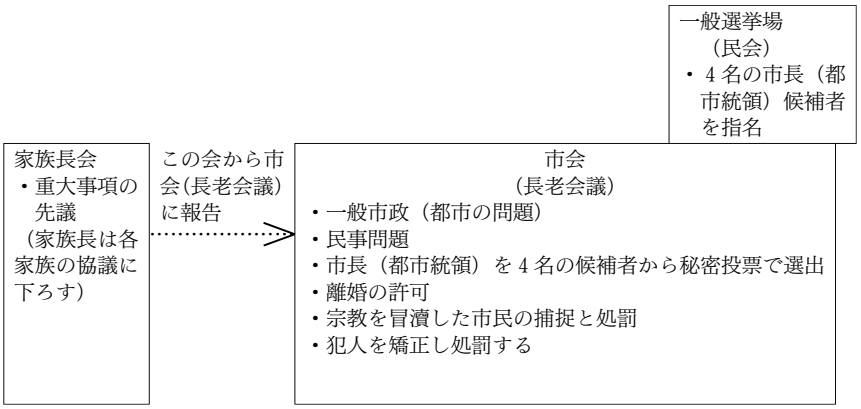
重大な問題は家族長（部族長）会に持ち込まれ，家族長（部族長）は受け持ちの家族に伝

[31] 重大な問題は，家族長に持ち込まれ，次に家族長はそれを各家族に伝える。そこで十分討議した後に市会に提出される。問題が，全島会議に持ち出されることもある。この全島会議について詳細は書かれていないが，直接民主制をこの国では取り入れていたと考えられる。

[32] この会議（会合）は市民の自発的会合である。原文では，comitia publica である。

える。そこで問題を十分討議してから，その結果を市会（長老会議）に提出する。時には問題が全島会議[33] に持ち込まれる場合もある。

（図－７）　ユートピア共和国での審議・協議決定機関[34]



3.2　産業と職人と有閑層

ユートピアの職業には，農業，毛織物業，亜麻織物業，石工職，鍛冶職，大工職などがある。ユートピア人の誰も農業について共通の知識を持ち，この道の熟練者であり，小さいときから学校で生活習慣を教わる旁ら，都市の近郊の農村（田舎）で農業体験をする。農業の知識の他に，自分独自の技術を取得しなければならない。それは，毛織物業，亜麻織物業，石工職，鍛冶職，錠前職あるいは大工職などに関する知識[35] である。知識は，一般的に，世襲されるが，本人が希望すれば父親以外の知識を身につけることもでき，さらに２つ以上の知識を身につけることもできる。本人には職業選択の自由があるが，都市が特に必要とする場

[33] この会議は連邦国家の会議である。ユートピア共和国は 54 都市からなる連邦国家である。「毎年アモーロート市にあらゆる都市から各々３人の学識経験も優れた長老が国家の共通の問題を議論するために集まってくる」（平井訳 72 頁）と記述されている会議がここでの全島会議に当たる。原文では，consilium insulae である。この会議は 162 人で進行される。この会議では，例えば，どの都市で物資の不足があり，どの都市で物資が有り余っているかの情報交換が行われる。その情報を基にして資源の再配分がなされる。その際に，連邦会議が資源配分に対してどのような働きを担うかについては詳述されていない。

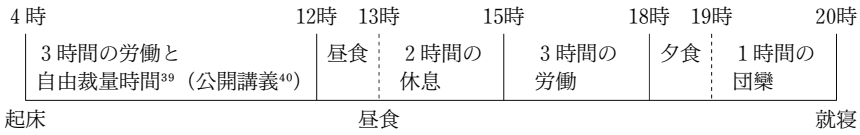
[34]『ユートピア』の役人についてついての第３章で民会（一般選挙場），市会（長老会議），全島会議について触れられているが，この３機関の権限や討議される問題に関する詳しい記述はない。市政についてはこの機関でのみ協議・審議することを法令で規定している。これ以外のところで議論する人は死刑に処せられる。

[35] モアは，職人を技術者であり，かつ，知識を巧みに用いて有用なものを仕上げる才能をもつ人と考えている。彼は，その知識を身につけることは社会的正義であると確信していた。「ユートピア人は前にあげた技術のうちどれか１つは必ず身につけなければならないのである。」（『ユートピア』81 頁）とあることからも，技術を身につけ，生活に有用なものを生産することがユートピア市民にとって義務である。

合にはその限りではない。

ユートピア人は，皆何かしら有益な職業に就き，その需要を十分に満たす生産物を産出し，かつ公の賦役にも仕えている。ユートピアの職人は，1日に6時間を労働[36]に割り当てる。午前中に3時間の労働をし，正午に昼食をとり，午後の2時間の休息後，3時間の労働をする。夕食を摂り，夕食後の1時間が団欒[37]の時に当てられる。夕方8時頃には，床につき，8時間の睡眠を取る。空いている時間は各自好きなように自由に使って[38]よいことになっている。

（図－8）ユートピア共和国市民の1日[41]



ユートピア島には，肉体労働が免除される人（有閑層）がいる。その第1は，家族長（部族長）である。彼らは法律によって労働が免除されている。しかし，家族長（部族長）は，他の者の範となるように働く必要がある。第2に，一般市民によって肉体労働を免除され知的集団が存在する。職人は肉体労働者であるが，肉体労働が免除され学問に生涯専心する知的一団がいる。この一団から外交使節，司祭，主族長（部族長頭領）そして市長（都市統領）が選出される。労働の免除される人は，ユートピア島では，500人には達しない。

3.3　市民ではない奴隷

ユートピア島には，社会階層の外の人々として奴隷がいる。ただし，戦争捕虜は奴隷にさ

[36] ユートピア共和国では，6時間で生活に必要な物資を生産できる，と結論づけている。それは，女子も男子と同様に生産に関わること，金持ちである司祭や地主なども生産物の産出に従事し，乞食や従僕なども労働につくことが出来るユートピア共和国では，6時間の労働で十分である，と結論づけている。当時のイングランドにおいて金持ちや乞食・従僕を労働力に加えることは，一種の社会改革を実現することを念頭に置かないと不可能である。モアは，その改革を実行できると考えていたのであろうか？

[37] 夕食後の一時間は団欒の時間であるが，夏なら庭園（裏庭），冬なら会堂（神殿）で団欒時間をもつ。ユートピア共和国では，音楽の練習をし，高尚な話題に花を咲かせるが，賽賭博やその他愚劣でいかがわしいゲームに興じることはない。

[38] この空き時間をなにか有益な知識の習得に使うことが示唆されている。

[39] 職務から解放された時間である。この時間は乱痴気騒ぎに当てる時間ではない。この時間を個人の知識の修得に当てることを豊かにする時間である，と『ユートピア』では記述されている（平井訳83頁）。

[40] この講義に出席する義務があった市民は学問研究に身を委ねるべく選ばれた有閑層のみであった。そのたの一般市民が参加するのか，あるいは，自身の職の労働をするのかは，その個人に委されている。

[41]『ユートピア』には午前中の市民の行動に関する詳細な記述がない。ただ，午前中に3時間の労働をすると規定するのみである。また昼食あるいは夕食に1時間を割り当てるとは明確に記述していない。

れない，また奴隷の子も奴隷にはならない。この島では，奴隷は世襲制ではない。それでは，奴隷にされる（あるいは奴隷になる）人は，どのような人なのか。それは，第１に，凶悪な犯罪のために自由を剝奪された人である。たとえば，次の⑴，⑵あるいは⑶に該当する人である：

⑴　逃亡者･脱走者は，奴隷刑[42]に処せられる。居住する州（都市）の境界外に出るときには，市長（都市統領）の証明書が必要である。この証明書をもたないで境界をうろついたり，それを持たないで境界の外に出る人は，逃亡者・脱走者とされる。

⑵　夫婦の契りを破壊した者（姦通を行った者，あるいは，姦通を企てた者など）は，最も過酷な奴隷刑に処せられる。離婚する場合には，市会（長老会議）の許可が必要である。

⑶　外国でユートピア人を不具者にするかあるいは殺害する者を犯人として要求し，その者を奴隷するにか，あるいは，死刑にする。

政治犯である反逆罪は，奴隷にされるのではなく，即座に死刑に処せられた。

第２に，他国の都市で重い罪科のために死刑宣告を受けた者が奴隷にされた。第３に，外国で哀れな労働者として過酷な仕事をさせられていた者であり，かつ，自ら志願した者は，ユートピア国において奴隷になった。

次に，奴隷の待遇である。第２の奴隷は，極僅かな代価あるいは無償でかわれ，ユートピア島に連れてこられた人である。年中無休で労役に使われるばかりでなく，足かせ・手かせまで嵌められる。第１の奴隷は，もっとも残酷な取り扱いを受けた。第３の奴隷の取り扱いは，良心的であり，丁寧であり，ユートピアの自由民と殆ど変わらない。ただ，自由民よりも労働が厳しいだけである。

第４節　ユートピアの生活様式：大家族による共同生活と資源配分

4.1　大家族

ユートピア市民は家族（世帯）で生活し，家族（世帯）は一家眷属（血縁関係）からなる大家族である。男子は，子々孫々に達するまで自分[43]の生家に留まり，最年長者である家長[44]に従う。最年長者が家族を統率し，妻は夫に，子供は親にそれぞれ仕える。どの都市も４つに区分され，各地区の中心に市場があり，そこに幾つかの建物があり，全家族の生産品が持ち込まれる。あらゆる種類の品物が種類別に倉庫や納屋に納められ，各家族の父親，戸主（家

[42] ２度逃亡・脱走を試みると，罰として奴隷にされた。
[43] 男子は生家に留まったが，女子は法定年齢に達すると，結婚し，婚家に行った。
[44] ユートピアでは，家父長制であった。一種の長老者支配（長幼の序）を基本にした社会であった。

父長），がそこにやって来てその家族の必要とするモノをすべて持っていくことができる。戸主（家父長）は，彼の家族が必要とするものは対価なしに持っていくことが出来る[45]。食料品市場に野菜や果物や獣の肉や鶏肉が運び込まれ，また獣類は市外で屠殺され，洗浄されて市場に搬入される[46]。この仕事は奴隷の仕事である。ユートピア共和国では，屠殺が憐愍の情を傷つけるとして，禁止されている。

ユートピア島では交換もせず，貨幣も使用しない。ユートピア共和国においては，貨幣を使用しない配分機構を想定し，市場経済による配分が否定されている。なぜこのような想定ができるのであろうか。というのは，すべての物資が豊富にあり，しかも誰も必要以上に貪る心配のないユートピア共和国では，所望する生産物とその必要量が配分されるからである。この意味でも，ユートピア共和国は，生産問題のみならず，資源配分に関する配分問題からも解放されている。ユートピア共和国は，各家族の必要分は悉く提供される桃源郷であると，考えられる。すなわち，ユートピア島では，必要とするものはすべて提供できるほど十分に生産され，かつ，必要とする家族に配分される，と考えられている。

ユートピアでは誰１人として食事に困る人がいない。ここで取引のために貨幣を必要としない社会である。ユートピア共和国で貨幣（当時では金）の保有あらいは使用を受け入れないのは，貨幣の機能に対する不信からではなく，貨幣が備えていることによる誇示効果（高慢心）に対する嫌悪からである。金持ちを神様のように崇拝する人間の狂気沙汰に対する嫌悪である。貨幣の仏神化から生じる社会問題を回避するために，貨幣の必要のない社会を創り上げている。それは，ユートピア市民（島民全員）があたかも一つの大家族をなし，その家族内で物資が平等に配分される社会を構築している，と推測される[47]。

4.2　外国貿易と貨幣

ユートピア共和国内の物資（生産物）の交換には貨幣は用いられないが，外国との交易は，貨幣（金や銀）の媒介によって実行される。ユートピア共和国から輸出される物資は，穀物・蜂蜜・羊毛・亜麻・木材・茜草・獣皮・蠟・獣皮・皮革・家畜類である。輸入品は鉄である。

ユートピア共和国で貨幣が使用されないのは，全島民が家族として１つの世帯を形成して

[45] 食料品などが不足することは，ユートピアでは起こらない。この物資の不足に直面しない人がユートピア人である。物資の不足がないので，ユートピア人は，貪欲になることもなく，虚栄心を持つこともない。

[46] 市内に不潔なものの搬入を禁止している。それは，空気が汚れ，腐り，悪疫を引きおこすからである。

[47] たとえば，ある都市で物資の不足があると，何の反対給付もなしに他の都市から得ることが出来る。ある都市に物資が不足することは，アローモート市に３人の知識経験の豊富な人が集まる全島会議で情報交換で知られる。

いるので，交換に貨幣を必要としない。これは，１つの家庭内で生活物資の配分に貨幣を使用しないのと同じである。貨幣は海外（他の国）との取引を決済のために使用される。『ユートピア』では，ユートピア共和国には余剰生産物が十分にあり，ユートピア国がいつも輸出超過国[48]にあると記述されている。国際的な決済が金あるいは銀でなされているので，ユートピア共和国の都市の金庫には金が収められている。しかし，ユートピアでは取引に金あるいは銀を使用しないので，ユートピアはその金銀を取引相手に貸し付ける[49]。

ユートピア人が金や銀を必要とするのは，第１に，戦争の際に外国傭兵を雇用する時である。高い賃金で外国人を軍人として雇用するために金や銀を用いる。「戦争という事態のために備えて金銭を貯えているのであって，金銭そのものを重んじているのではない。」[50]と記述されている。

第２に，ユートピア国では，金や銀で便器を作る。共同の会館や家庭の便器に金や銀を使用する。奴隷を縛るための足枷・手枷の鎖にも用いる。さらに，破廉恥漢として蔑まされている人の耳飾り，指輪，首鎖，鉢巻きに使用される。何故このような用途に使用するのであろうか。それは，金や銀は汚い物であり，恥ずべき物であることを知らしめるためである。

4.3　共同生活と長老支配：平等な配分と長幼の序

30 家族に割り当てられる一軒の家族長（部族長）の住宅（会館）がある。会館は一定距離ごとに建てられる。1 つの会館には左右それぞれ 15 軒の家族が割り当てられる。1 つの会館では 30 家族が食事をし，各会館の数人の賄い係は，一定の時刻になると，市場に行き，食事に必要な食料品を人数に応じて受け取ってくる。昼食と夕食の決まった時刻には，真鍮の喇叭を合図にそれぞれの会館に集まり，そこに食べ物が分配される。会館では，汚い仕事や賤しい仕事やつらい仕事は，他の骨の折れる雑事と共に，すべて奴隷の仕事[51]である。家族の婦人[52]も順番に料理を引き受け，食物の調理やその他の食事に関する仕事をする。ユートピア共和国では，奴隷が配分機構の実質的な労働の担い手である。

会館での食事にユートピア共和国における共同生活の風景を見ることが出来る。そこでは，男女が一緒に食卓に着き，老人と若者や幼少者が一緒に食卓を囲む。男子は壁際のベンチに腰を掛け，女子は男子に向き合って食卓に着く。乳母には，暖房の火やきれいな水および揺籃の揃った特別の部屋が用意され，そこで子のオムツを取り出し，子を遊ばせ，寝かしつけ

[48] ユートピア共和国が輸入超過国にならないと言う想定は厳しいであろう。
[49] ユートピア人は貸し付ける金や銀に対する利息を要求することは滅多にない。
[50]『ユートピア』（平井訳 102 頁）
[51] 社会的身分の外におかれた奴隷がユートピア共和国の重労働や汚い労働の全てを担っていた。
[52] ユートピアでは，婦人は料理や調理をそのた食事に関する一切の世話をする。

る。

ユートピア共和国では，社会的弱者に対する配慮がなされている。通常，母親が子に乳を飲ませるのであるが，母親の死亡や傷害などの折りには，家族長（部族長）の婦人が乳母の世話をする。乳母になる婦人による奉仕の仕事は，ユートピア共和国では最高の賞賛に値する。5歳以下の子供たちも乳母のもとで世話をするが，その他の少年少女，結婚前の男女の若い者たちは，食卓で給仕をするが，若すぎる場合には食卓に侍して共に食事を摂る。家族長（部族長）夫婦は上座食卓の中央に座り，二人の長老と家族長（部族長）夫妻が同席[53]する。彼らの両側には若い人たちが座り，その隣には老人が座る。同じ年齢の者が一堂に会し，違った年齢の者とも一緒に座る。1つの食卓には4人の長老が座る。

このような制度は，長老の重々しく敬虔な態度が若者の自由奔放な言葉や振る舞いを牽制することを期待して作られた。老人全部に最初に料理が配られ，それから残りの者には皆同じように配られる。老人は，両側に座っている若者に料理を適当と思うだけお裾分けをする。これによって長老としての尊敬を受けている。

ユートピア共和国では，老人が若者の目付役になっている。昼食でも夕食でも食事の前に，善き行いや徳に関する文章をよむ。夕食時には音楽が流される。

また各都市には，4つの病院がある。病院は大きく，小都市のようである。医療に必要なあらゆるものが備えられている。それのみならず，有能な医師がいつも宿直していて，行き届いた看護がなされる。不治の病に苦しんでいる人には，司祭と役人が安楽死を進め，その苦痛からの解放と生き恥からの解放，さらに周囲の者の負担を軽減する。その死は，神の意志を説く者の忠告に従う者で信仰者の行為として相応しい者であると見なされた。司祭や役人の許可なく死ぬ者は，死骸は悪臭の立ちこめる泥沼に捨てられる。

ユートピア共和国では，家族で共同生活を営み，家族長（部族長）などの長老が社会のルールを規定し，貨幣の使用による人と人の統合ではなく，神の慈愛を分かち合い私有財産を破棄した人々での間での人と人の交わりによる社会統合が説かれている，と解釈される。

4.4　結婚

ユートピア共和国では，女性は18歳以前には結婚は許されず，男性は22歳までは結婚が認められていない。結婚前に肉体的な過ちを犯した者には，法的に制裁され，一生涯結婚が認められない。この不始末をしでかした子供の親夫婦は，若者の監督を怠ったことにより厳しい社会的非難を受ける。

[53] 教区内に会堂があれば，その会堂の司祭夫婦も家族長と同席する。その隣には老人たちが座る。

夫婦の契りを破壊したものは奴隷刑になる。その被害者に当たる配偶者は姦通者から離婚することが出来る。正しい結婚生活においては，一生涯一人の配偶者と生活を共にし，襲いくる辛苦苦難を耐え忍ばねばならない。このような一夫一婦制[54]がユートピア共和国では行われている。婚姻は配偶者のいずれかが死ななければ破棄できない。姦通によって婚姻の契りが無効になるか，相手が耐えられないほど異常な振る舞いをした場合には，婚姻の契りを破棄することは出来る。

結婚後，妻の体に肉体的欠陥があるという理由で，夫は妻を離縁することは出来ない。それだけの理由で夫が妻を追い出すのは，援助と慰安を最も必要とする人を追い出し，捨てるようなものである。これは許すことの出来ない非道な行為である。一旦結婚すると，簡単に相手を変えることができないので，結婚する前に[55]相手の精神的な面のみならず肉体的資質も事前に知っておく必要がある。結婚後に相手の肉体的欠陥を知っても，その相手を変えることはできないのであるから。

夫婦が円満に離婚することが出来るのは，お互いに十分に了解した場合のみである。ただし，市会（長老会議）の許可が必要である。

4.5　ユートピア人の思想と生活信条：快楽な生活

ユートピア人は，貨幣の保有と使用を廃止し，知の喜びを楽しみ，それを求めている国民である。また人間の幸福とはどのようなものなのかを求め，探求している国民で，快楽[56]を持って人間の幸福の全てを規定しようとしている。しかし，ユートピア人は，決して，すべての快楽の中に幸福があると考えてはいない。善良で健全な快楽の中にのみ幸福があり，そして人の本姓が徳[57]の力によって引き入れられて行く，と考えている。

理性は，人の心に神に対する愛と畏敬の念を沸き立たせ，また自分自身が喜びと楽しみの生活を送ることを求めるとともに，他の人が快楽の生活，楽しい生活にはいり，同じ人間性に預かることを出来るようにその人達を助けることを求める。他の人の窮乏と苦難をみて，それを軽くすることを人に勧めることこそ人間性と隣人愛に基づく正しい行為である。他に

[54] これにも例外がある。姦通によって婚姻の契約が無効になった場合，あるいは，相手に絶えられない横暴な振る舞いがあった場合には，市会の承認を得て，配偶者を変えることが出来る。

[55] 結婚前に相手の肉体的資質を確認するユートピアでの慣習を紹介しよう。結婚前に，婦人の裸体をその結婚相手にみせ，他方，その結婚相手は婦人に自身の裸体を見せる，という慣習がある。

[56]「人間がそこに自然に喜びを感じるような，肉体や精神のあらゆる状態と運動とを快楽と呼んでいる」（平井訳 114 頁）

[57]「彼らの考えによれば，徳とは自然にしたがって秩序づけられた生活であり，われわれはそのような生活をおくるよう神によって定められている」（平井訳 111 頁），「徳とは，彼らの定義によれば，自然の法にしたがって規定される生活」（平井訳 112 頁）

人に楽しい生活，つまり快楽の生活を取り戻すことが人間としてすべきことであるならば，その同じことを自分自身に対して行うことも自然なことであろう。「人間のすべての行為は，すべての徳そのものでさえ究極的には快楽をその目的とし，幸福の源としている」とユートピア人は考えている。

瞑想に災いされて不自然であるにもかかわらずあえて快適であると考えられている多くのことがあるが，そのような快楽は幸福にとって邪魔になるだけである。この虚妄の快楽[58]にとりつかれると，人間は正しい自然な快楽を感じる力を失う，とユートピアの人は考えている。贋の快楽に眩惑されて，とんでもない錯覚に陥る人がいる。例えば，先祖代々金持ちであり，先祖伝来の土地を持っているから，自分は高貴な生まれである，と思いこむ人がいる。また宝石類を無闇に愛玩する連中なども虚妄の虜になっている。ただ見て楽しむ無用の財貨を蓄える連中は，真の楽しみと贋の楽しみを取り違えている。このような連中の中に博打打ち[59]，狩猟家や鷹狩り家[60]も含められている。

真正な快楽には，心の快楽と肉体の快楽に属するものがある。ユートピア人は，心の快楽こそあらゆる快楽の中で最も根本的であると考え，それは徳を行うときと善き生活の自覚から生じるという。前者の心の快楽には，知性の喜びがあり，真理の瞑想から生じる喜びがある。善い生活を送ったという甘美な思い出や未来の幸福に対する確信も心の快楽に加えられる。肉体の快楽には2種類ある。第1は，飲食による快楽や排泄作用や生殖行為を営むときや身体の痒いところを掻いている時にも快楽がある。また音楽から生じるような快楽もある。第2は，肉体の静かな，調和のとれた状態にある快楽である。これは，健康な状態に他ならない。ユートピア人は，健康を人間最大の快楽，あらゆる快楽の根源であると考えている。

第5節　平和と戦争：平和を求め自衛戦争の正当化

5.1　自衛戦争および報復戦争の正当化

ユートピア共和国では，戦争は嫌われ呪われているが，放棄されてはいない。ユートピア共和国では，危機に具えて，毎日男も女も軍事訓練をしている。ユートピア国では，自衛戦

[58] 美しい衣装を着ればそれだけで自分も立派になったように思う連中も虚妄の快楽の虜になっている，とユートピア人は考える。愚にもつかない尊敬をうけて得々とするもの，膝づいてもらう，なども贋の快楽である。

[59] 彼らは言う，「テーブルの上で賽をなげて一体どんな楽しみがあるのか，と」（平井訳117頁）

[60]「犬が喧しく吠えるのを聞いてどんな快感があるのか。快感どころかかえって不快の感が生じるのが本当ではないか。」（平井訳118頁）「獲物を殺す期待，獲物をずたずたに引き裂くあのわくわくした気持ち，これが快感を与えてくれるというのか。…，か弱く罪のない兎が犬のために喰い殺されるのを見て，いっぺんの憐れみの情を示すべきではないであろうか。なぜなら，弱い者が強いものに，臆病な者が残忍なものに，無邪気なものが冷酷無慈悲なものに殺されるからである。」（平井訳118頁）

争は正当化される。この国では，第１に，自国を護るための武力行使，第２に，友邦国に侵入した敵軍を撃退するための武力行使，第３に，圧政に苦しむ友邦国を虐政の桎梏から解放するための武力行使は正当化される。第２の戦争あるいは戦闘は，友邦が受けた数々の不法行為に対する報復戦である。特に，友邦の訴えが妥当であり，その正当な権限に基づいて訴えられている物件の返還に相手国が肯んじない場合[61]，あるいは，友邦が正義の仮面の下に不正極まる迫害を蒙った場合などには，敵愾心を持って戦争を始める。ユートピア人は決して自身の利益のために戦争をするのではない。

5.2　戦略と戦術

ユートピア共和国の戦略[62]・戦術では，巧みな政略を用いて敵を圧倒する知謀による勝利が真っ先に選好されている。ユートピア人は，戦争目的がその要求事項の貫徹であるので，無闇に戦闘で生命を危険に晒すことは避ける。この戦略・戦術とは，

⑴　買収政策[63]：国璽の捺してある布告書を敵国の要所要所に掲げ，君主等を暗殺した者に莫大な報償金[64]を約束する。

⑵　揺動あるいは扇動政策：敵陣に争いや不和の種を蒔く。たとえば，王の兄弟あるいは貴族の中に王位簒奪の野望を懐かせるあるいは王位継承権を口実に扇動する。

また戦争の主な担い手として傭兵[65]を割り当てている。戦争に送る順番は，傭兵，戦争の原因になった当該国の軍隊，他の友邦国の援軍，最後に，止むを得ない場合に，ユートピア市民を戦場・戦争に送り込む。この市民兵は，志願者から選抜されたものである。市民兵は，女子と男子の混合[66]である。

---

[61] 例えば，友邦国のネフェロゲット人（夢想国の人の意味）の貿易商人が法の下にアラオポリス人（盲人国の人の意味）から不当な迫害を受けた，とユートピア人が判断するときである。

[62] 戦争の勝利が流血を伴うものであれば，ユートピア人はそれを後悔するだけではなく，恥辱と考える。そのように高い対価を払って戦捷を勝ち得たとしても，彼らはそれを軽蔑するだけである。それよりも巧みな政略で敵を征服することを喜びとした。

[63] この買収政策は，卑劣で臆病者の政策と揶揄されがちであるが，流血の参事もなくことをなされるならば，賢人の誉れであり，この政策こそ憐憫と慈悲の行為であるとユートピア人は考える。僅かな犯罪者を死刑にするだけで戦争が終結すれば，夥しい下層庶民の生命を無駄にすることはない。

[64] この効果は，贈り物や報奨金に目の眩んだもの達が，相互に，猜疑の目を向け，やがて仲間同士が反目し合うことである。

[65] ザポレット人（喜んで身売りする者の意味）がユートピア国によって雇用されていた。ザポレット人は，ユートピアから東方５百マイルの所に住んでいる。国民性は，非常に粗暴で，残忍性をおびており，鬱然とした密林や険しい山岳地帯に生まれ，育ち，住んでいる人種である。農耕民族でなく，狩猟や泥棒に生計は依存していた。最も危険な戦場に傭兵を送るが，生還する者は極少ない。しかし，ユートピア人はこのことを意に介しない。というのは，その極悪非道なザポレット人をその汚い悪臭のする巣窟共々この世から消すことになり，人類のために貢献したと考えている。

[66]『ユートピア』では，良人に従って戦争に参加する婦人のことを具体的に記述している。

市民兵が投入されるのは，傭兵では埒があかなくなった後である。戦いになるとユートピア市民兵[67]は，緒戦から強くはなく，戦いを続ける内に執念深さを発揮し，徐々に不適な勇気をまして，最後には一歩たりとも撤退しない勇猛な兵[68]になる。彼らが勇猛であり死んでも敗れることを潔しとしないのは，第１に，彼らが戦術の知識や武術を心得ているからであり，第２に，教育の力であり，第３に，国家の優れた法制度[69]にある。

休戦条約が一旦結ばれると，ユートピア人は忠実に守り，破ることはない。彼らは，敵国を掠奪したり，荒廃させたりはしない。ユートピア人は戦利品を取ることはなく，非武装の人を殺すことはないが，降伏を拒んだ者は死刑にし，他の兵は奴隷刑にする。

戦費を１円たりとも友邦諸国の負担とはしない。戦費全額をその敗戦国に課す。すなわち，それを敗戦国民の負担（現金と領土からなる）で賄う。ユートピア共和国は，その一部を現金で要求し，その大半を領土で要求する。ユートピア共和国は，敗戦国から得た土地を多くの国に持っていて，その国にユートピアの財務官を派遣している。その余剰金[70]は，ユートピアの金庫に送金される。

モアは，平和を願っているが，自衛戦争や報復戦争を正当化し，具体的な平和政策や平和主義原則を唱えてはいない。彼は，戦争戦略について展開している。モアは，ユートピア共和国一国の繁栄を追求している。しかし，世界全体の平和を取りあげてはいない。ユートピア国は，友邦国を沢山抱えており，戦争に勝利し，相手国を一の属州として支配下に入れている。モアは明確に植民地につて言及してはいないが，ユートピア国の領土拡大は，17 世紀以降イングランドが進める領土拡張政策（植民地政策）に繋がる，と理解できるのではないであろうか。

第 6 節　ユートピア共和国の宗教

6.1　信教の自由と神の力

ユートピア共和国では，各人に信教の自由が保障されている。すなわち，ユートピア共和国では，何人も自己の信仰の故に処罰されることはないという法令が措かれている。それは，第１に，平和を維持するためであり，第２に，宗教の発展に寄与するためである。もし最も聖なる宗教は１つであると規定すると，その宗教がくだらない迷信のために蹂躙されること

[67] ユートピア市民兵の組織は，市民の中から人格と勇に秀でた人を選出し，彼を指揮官（全軍の支配･統治･指揮の権利が委ねられる）とする。この指揮官の下に，２人の優れた者を任命する。

[68] 彼らの武具甲冑の類は，堅固であり，突いたり切ったりしてもびくともしない。甲冑を付けて泳ぐことができた。武器では，弓（強弓）が使用された。白兵戦では，剣に替わって戦斧も使用された。

[69] 法律制度によって，ユートピア人に子供の時から骨の随まで染みこむ高邁な精神が凛々たる彼らの勇気を一層強力にした。

[70] 貸し付けられるときもある。

をユートパス王[71]が恐れていたからである。それゆえに，ユートピア共和国では宗教を１つに決めてはいない。ただし，彼は，人間の肉体が霊魂と共に滅びることを厳しく誡め，世界は摂理によって支配されていることを説いていた。他の宗教を信仰している他者を合法的かつ平和的に冷静な態度をもって改宗させる努力することはできるが，しかし，暴力を振るい，乱暴で扇動的な言葉を弄し，強引，かつ，がむしゃらに改宗させようとすることは，ユートピア共和国では追放あるいは奴隷の刑に処せられた[72]。

そのため，ユートピア共和国には多くの宗教[73]が存在しているが，彼らの間で死後に，悪は厳しく罰せられ，善は大いに報われると信じられている。自然の力から生じるものではない真正の奇蹟が神の全能の力[74]の現れであり徴であり，万物の創造・生成・発達・変化・死滅が神の働きによることをユートピア人は信じている。唯一の神が存在する点において，全てのユートピア人は同じ考えを持っている。彼らは，神の奇蹟を重んじ崇拝している。ユートピア共和国では，ラファエル達が伝えたキリスト教の教義・律法・奇蹟および殉教者の節操が受け入れられ，洗礼の聖き水に浴し，キリスト教が受け入れられている。

ユートピア人は，占い術[75]を馬鹿にしているが，自然の力に拠らない奇蹟を神業であり，神の存在する証しであるとして崇拝し，自然の瞑想とその瞑想から生じる賛美を神の喜びであると考えている。またユートピア共和国には，一途に信仰に没頭し，学問に対して関心を持たず，俗的な事物の知識を殆ど問題にしない人も多くいるが，しかし，怠惰な生活を好まず，死後の冥福を生前の勤勉と善き行いによって得られると信じ，怠惰な生活を嫌悪し拒否している。この人達は，病人を看護したり，公共事業[76]に奉仕したりするのみならず，私人の召使いとしてはたらき，奴隷以上に働くのである。この人々には２派が存在する。この２派につ

[71] これはモアの造語である。原文では，ギリシア語で $ουτοπος$ である。ここで $ου$ は not，$τοπος$ は place を意味する。ユートパス王とは「民のいない王」という意味になる。平井氏は，『改訂ユートピア』（中公新書）の訳注 121 において，ユートパスがプラトンの『ティマイオス』でのアトランティス島（$ατοπος$）を意味する語に由来する，と指摘している。この指摘は興味深い。

[72] ユートパス王がユートピア共和国に君臨し始めたころ，その住民達が宗教問題のために絶えず紛争と軋轢に明け暮れていた。各宗派が各陣営に分かれて抗争し，国の乱れの原因となった。彼は，君臨するやいなや直ぐに，法令を作り，信教の自由を定めた。

[73] 例えば，ユートピア島のある者は，太陽，月，その他の星，有徳の誉れの高いかつ名声のあった人を唯一絶対の神として崇めている。しかし，ユートピア市民（国民）の大半は，これらの宗教をすべて排撃している。

[74] この世界に知られざる永遠の理解を絶し，人間の智慧の能力と限界を超越した，ある１つの神の力がその大きさによってではなく，その善と力によって遍く存在していることを信じている。これを万物の父と呼んでいる。

[75] 鳥獣のしぐさや天候による占いや，託宣，星，夢，手相に拠る占い。

[76]『ユートピア』では，国道の修理，溝の掃除，橋の修繕，泥炭・砂利・石を掘ること，あるいは倒木し，木材・食糧などの都市への運搬を公共事業として挙げている。（平井訳 166 頁）

いては，次の 6.2 項で検討する。

6.2　敬虔派と賢明派

一途に信仰に没頭し，奴隷以上に労働する第 1 のグループは敬虔派（あるいは独身派）である。この派は，イングランドにおいて宗教人あるいは聖職者あるいは修道士と呼ばれる人であり，純潔な独身生活，婦人を近づけず，かつ，獣肉[77] を喰わず，現世の生活の快楽を有害として否定し，来世を憧れ，１日も早く来世がくるのを待ちわびながら，黙々と熱心に労働に精を出す。このような敬虔派の生活様式は信仰によって導かれている。その第 2 のグループは賢明派である。この派も敬虔派と同様に労働に熱心であるが，敬虔派とは違い，結婚生活を営み，かつ，この生活を大切にし，子孫をもうけること以外に祖国に対する義務を果たす道なしと考え，身体を堅固にし，かつ，労働に都合のよいゆえに 4 つ足の獣肉も食べる[78]。

6.3　司祭とその社会的役割

司祭は敬虔派（あるいは独身派）に属する。どの都市にも会堂（神殿）数と同じ 13 人の司祭がいる。司祭は，司教（司祭長）の統率下にあり，他の役人と同様に，一般市民の中から秘密投票によって選ばれ，選出後には叙階式を同じ仲間からうける。あらゆる信仰問題の監督者であり，宗教儀式の主宰者であり，社会風紀の裁判官[79] であり，かつ，平和の守護神である。すなわち，司祭は凶悪なユートピア人を宗教的儀式から破門[80] し，また青少年の教育に当たり，正しい心や風俗を教え，学問を教え，国家の発展に必要な信仰を叩き込むのにも熱心である。この教育や教化は，国家の平和を保つのに大切である。司祭は，戦争よりも平和が来ることを求め，次に，戦争が起こる[81] と，味方の勝利のために祈るが，血の勝利に終わらないことを祈る。国家が衰えるのは，腐った思想から生じる背徳によることをユートピア人たちは知っていた。

[77] その中には，鳥肉あるいは魚肉も食べない敬虔な人がいる。（平井訳 166 頁）

[78]『ユートピア』では，賢明派について，これ以上の説明は加えられていない。

[79] 司祭の任務は助言や奨励を与えることであり，それを矯正し処罰するのは市長やその他の役人の義務である。

[80] 破門がユートピアで最も恐れられている刑罰である。一日も早く後悔し，真人間になったことを司祭に見せない限り，宗教を冒瀆する凶悪な人間として市会に拠って捕らえられ処罰される。

[81] 戦争が起こると，13 人の中から 7 人が従軍し，出征すると，その代わりに 7 人の司祭が補充される。従軍司祭が戻ると，彼らは元の地位に戻る。

6.4　司祭の特権

ユートピアでは司祭ほど地位もあり名誉もある職務はない。司祭が罪を犯しても，一般人と同様な裁判にかけられることはなく，神と自身に委ねられる[82]。司祭が腐敗堕落した生活に陥ることがない，と信じているからである。すなわち，有徳者中の有徳者で，その人格故に尊敬されている。しかし，この共和国では，司祭には権力が与えられていない。

6.5　合同礼拝：会堂（神殿），偶像崇拝の否定あるいは生け贄の禁止

ユートピア共和国では，各人の宗教は異なり，信仰も異なるが，聖なる存在を崇拝する点では一致している。会堂（神殿）に異なった宗教者が集まり，また人々が聖なる存在を拝むために精神を集中し神に対する瞑想に沈潜できるように，会堂（神殿）は薄暗くされる。さらに，各人が心の中に神の姿を描くことができるように，会堂（神殿）にはいかなる神の像も置かれていない(偶像崇拝が否定)。このように，異なった宗教者が同時に行う合同礼拝では，個々人の信仰や儀式を歪め破壊しないように細心の注意が払われる。礼拝時に生け贄(生け贄の禁止）を捧げないが，乳香その他の香類は焚き，蠟燭は点す。

会堂（神殿）では，男子は右側，女子は左側に座り，また男子はその家長の前に座り，女子は主婦の前に座る。家長と主婦は，家庭の外においても，家庭内でと同様に，権威と責任をもって監督に当たらなければならないからである。家庭の外でも，この２人は（世帯）の行儀作法を厳しく監督しなければならない。会堂（神殿）では，若者が時に悪ふざけによって神を恐れない行為を取らないように，若者は，必ず年長者と一緒に座るように配慮されている。このようにしているのは，善にいたる唯一の道は神を恐れる敬虔な心であるからである。

会堂（神殿）で一般会衆は白衣を着るが，司祭は，多彩でいろいろな種類の羽毛が折り込められている法衣を纏う。その織り方の中に宗教的な神秘が隠されている。司祭がこのような法衣を纏い法衣室から出てくる。会衆は床に跪く。司祭が起きあがるように合図する。次に，楽器の伴奏で神を讃える歌を歌う。最後に，会衆と司祭は，祈祷を型通りに厳粛に誦する。この文句をどう解釈するかは各会衆の自由に任される。神を自分の創造者・支配者・すべてのよきものの源と認め告白し，かつ，その御手から多くの恩恵を戴いていること，特に幸福と繁栄に恵まれた国家に生まれ，唯一の正しき宗教を信じ得たこと，を神に感謝する。

6.6　ユートピア市民の祝日

ユートピアでは，毎月の朔日と晦日，毎年の元旦と大晦日を祝日としている。月を太陰の

[82] トマス・モアには，聖人思想があり，人格の完成者として司祭を規定しているのであろうか。

運行で知り，年を太陽の運行で知る。ユートピアでは，人々は，毎月の晦日および毎年の大晦日の夕方に，食をとらずに広大で壮麗な会堂（神殿）に参集し，過ぎ去った１ヵ月または１ヵ年の生活を神に感謝する。また翌日は早朝から会堂に行き，聖なる日を第１日として新しい来るべき１ヵ月または１ヵ年の幸福と繁栄を神に祈り求める。

むすびにかえて

本稿で取りあげた，16 世紀のイングランドの現状を目の当たりにして社会改革を思い描いたと推察されるトマス・モアの『ユートピア』では，貴族や修道院による囲い込みが農業者を農村から追い出し，浮浪者あるいは盗人・窃盗者に追い遣っていることを指摘し，法律によって彼らを極刑の死刑にすることの理不尽さが説かれ，その社会問題を根本的に解決する思想として，血縁関係を基盤として，生産の共同制および私有財産制の廃止を実現する仕組みを入れ込んだ社会の可能性を訴えている，と理解される。

モアが拠って立った思想的基盤は，第１に，ラファエル・ヒロスデイに見ることの出来るギリシアの哲学者プラトンの哲人王の思想であった。プラトンの完全に平等な社会を実現すると，イングランドの社会問題（浮浪者や窃盗者の増加する社会問題）が解消すると見ていたのかも知れない。その完全に平等な社会とは，全ての人が住宅や食料品をなどの物質的なものを共有化することによって可能になり，私的所有の廃止の下で展開される社会的資源配分のルールを組み込んでいる社会であった。モアは，全ての人に必要な食料品や衣料品などが十分に配分される社会を実現し，社会を構成する全ての人の平等（平等な配分）を実現する命題を『ユートピア』で模索した，と推察される。

第２の思想的基盤は，キリスト教に裏打ちされた市民社会である。人間の真の幸福を快楽に置きながらも，隣人愛に裏打ちされた人間味豊かな考えの根拠は，宗教上の原理に由来する。すなわち，これは，人間の魂の不滅と神の豊かな恵みによって幸福が約束され，人間の徳と善き行為に対する死後の報いが与えられ，悪しき行為には罰が与えられるとういう宗教上の原理である。全ての市民が家族である市民社会（私有財産制が廃止される社会）を構築し，市民の階層間の移動を極力小さくし，富の分配を測る貨幣の所有と使用のない制度を組み込み，平等な配分社会を実現させる。貨幣のない世界で富が平等に配分される社会には，乞食も貧乏人も大富豪も存在しない。全ての物資が共有される社会では，全てが裕福になると考えることが出来る。〝誰も何も持っていないが，しかし，全てが豊かな社会〟がモアのユートピア共和国である。

モアのコミュニティは，共和国全体が１つの家族のように結び付けられ，顔の見える社会であり，資源配分において市議会（長老会議）が権限を持ち，司祭が人と人の絆を強める改造者となる社会である。グローバルな視点で共和国を捉えると言うよりは，１つの優秀な社

会としてユートピア共和国を描いている。この社会の仕組みを今日のスコットランド地域の再生あるいは分離独立運動のアイデンティティとすることができるのであろうか。われわれのスコットランド研究を突き進めるに当たって，資源配分における市議会（長老会議）あるいは政府の働きを強調するモアのコミュニティ思想は，市場と貨幣の使用した近代的な社会統治論とは対照的であるとしなければならない。他方で，モアは，海外への植民開拓を否定していない点において，近代社会の方向性を予測していたとも言える[83]。またスコットランド研究においても，この観点はグローバル化のもとでのスコットランド地域の再生論を進める上に置いても重要である。

参考文献

アリストテレス著（山本　光雄訳）『政治学』　岩波文庫　1972 年 1 月

アリストテレス著（村川　堅太郎訳）『アテナイ人の国制』　岩波文庫　1980 年 5 月

デイヴィッド・アーミテイジ著（平田・岩井・大西・井藤　共訳）『帝国の誕生』　日本経済評論社　2005 年 6 月

マックス・ウエーバー著（武藤・薗田　宗人・薗田　坦　共訳）『宗教社会学』　創文社　1978 年 6 月

マックス・ウエーバー著(大塚　久雄　訳)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』　岩波文庫　1989 年 1 月

マックス・ウエーバー著（阿閉　吉男・脇　圭平　共訳）『官僚制』　角川文庫　1971 年 8 月

マックス・ウエーバー著（脇　圭平　訳）『職業としての政治』　岩波文庫　1980 年 3 月

デシデリウス・エラスムス著（渡辺　一夫　訳）『痴愚神礼讃』　岩波文庫　1973 年 6 月

デシデリウス・エラスムス著（箕輪　三郎　訳）『平和の訴え』　岩波文庫　1961 年 6 月

太田　秀通著『アテネとスパルタ』　岩波新書　1973 年 10 月

ジョン・ガイ著（門間　都喜郎　訳）『トマス・モア』　晃洋書房　2007 年 3 月

インマニュエル・カント著（宇都宮　芳明　訳）『永遠平和のために』　岩波文庫　1985 年 1 月

梶田　孝道著『統合と分裂のヨーロッパ』　岩波新書　1993 年 11 月

ジョン・キャンベル著（坂本　賢三　著）『中世の産業革命』　岩波書店　1978 年 12 月

今野　國雄著『修道院』　岩波新書　1981 年 3 月

バルーチ・スピノザ著（畠中　尚志　訳）『国家論』　岩波文庫　1971 年 9 月

ウィリアム・シェイクスピア著（木下　順二　訳）『マクベス』　岩波文庫　2007 年 7 月

塩川　伸明著『民族とネイション』　岩波新書　2008 年 11 月

アダム・スミス著（大内　兵衛・松川　七郎　共訳）『諸国民の富』(四)　岩波文庫　1992 年 4 月

田村　秀夫著『トマス・モア』　研究社出版　1999 年 12 月

フェルディナント・テンニエス著（杉之原　寿一　訳）『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（上）（下）』　岩波文庫　1972 年 2 月

増田　史郎著『ヨーロッパとは何か』　岩波新書　1967 年 7 月

エドゥイン・ミュア著（橋本　槇矩　訳）『スコットランド紀行』　岩波文庫　2007 年

[83] モアに帝国思想があったかどうかは不明である。スコットランドがイングランドと連邦を形成し，海外に植民地開拓に乗り出したことを考え合わせると，モアの思想はその先を見ていたとも言える。モアは，古代のギリシアの植民を想定していると見る方が適当である，と私は考えている。

ジョン・ミルトン著（新井明／田中浩　共訳）『教会統治の理由』　未来社　1986 年 4 月
トマス・モア著（平井　正穂　訳）『ユートピア』　岩波文庫　1971 年 10 月
トマス・モア著（澤田　昭夫　訳）『ユートピア』　中公文庫　2009 年 6 月
ヨーハン・ホイジンガ（堀越　孝一　訳）『中世の秋（上）（下）』　中公文庫　1984 年 4 月
ジェフード・デランティ著（山之内　靖・伊藤　茂　共訳）『コミュニティ』　NNT 出版　2007 年 4 月
プラトン著（藤沢　令夫　訳）『国家（上），（下）』　岩波文庫　2009 年 11 月
プラトン著（森　進一・池田　美恵・加来　彰俊　共訳）『法律（上），（下）』　岩波文庫　1993 年 4 月
ジグムント・バウマン著（奥井　智之　訳）『コミュニティ』　筑摩書房　2008 年 1 月
ジョン・モラル著（木戸　毅　訳）『中世の刻印』　岩波新書　1972 年 11 月
ジョン・ロック著（鵜飼　信成　訳）『市民政府論』　岩波文庫　1971 年 1 月
ジャン・ジャック・ルソー（桑原　武夫・前川　貞次郎　共訳）『社会契約論』　岩波文庫　1971 年 11 月
ジャン・ジャック・ルソー（本田　喜代治・平岡　昇　共訳）『人間不平等起原論』　岩波文庫　1971 年 11 月

（くぼた　よしひろ　マクロ経済学，金融論専攻）